

石川県立美術館だより

平成15年8月21日発行 第239号



ガーベラを持つ少女 昭和45年頃
(2ページ「企画展示室(第7~9展示室)」参照)

石川県立美術館開館20周年記念

いわさき ちひろ展

～あたたかい心の色にふれる～

8月22日(金)~9月16日(火)会期中無休



おぼろ月 昭和57年
(3ページ「常設展示室(第4展示室)」参照)

日本画家 中町進の世界

8月21日(木)~9月29日(月)会期中無休

目次

いわさき ちひろ展.....2	企画展示室、県美Q & A6
中町進の世界3	貸出中の所蔵品、各地の展覧会6
加賀藩の美術工芸、俳画の世界4	企画展TOPIC、9月の行事案内他7
常設展示室 主な展示作品5	第33回文化財現地見学のお知らせ.....7
美術館小史・余話(37)5	所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信 ...8

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

企画展示室(第7~9展示室)

いわさき ちひろ展

8月22日(金)~9月16日(火)会期中無休

主催/北國新聞社(財)石川県芸術文化協会
ちひろ美術館・石川県立美術館



いわさきちひろ

子どもを描く画家として、また絵本作家として、戦前の日本に生まれ、戦争を乗り越えて画家として生きたいわさきちひろの作品は、今でも世代を超えて多くの人々の共感を呼んでいます。包み込むような柔らかさがありながら、時にははつと鮮やかな色彩、そして、リズムがあり、一本一本が多くを物語るような、美しい線で描かれた作品からは、ちひろの絵を描くことへの情熱、また戦争によって数多の生命や希望が失われたことへの怒りと鎮魂、未来を担う子どもたちへの期待と愛情などといった、様々な思いを感じ取ることができるでしょう。

いわさきちひろは、大正七年(一九一八)、陸軍築城本部技師の父と女学校教師の母との間に、三人姉妹の長女として、母が福井県武生町立実科高等女学校(現福井県武生市)に単身で赴任していたときに同地で生まれました。幼い頃から絵を描くことに興味を持っており、花嫁修業の延長として、洋画家のアトリエに通ったり、また書道家の門下にも入っており、最初の結婚で夫の赴任先である中国の大連に移ったことで中断しましたが、夫の死後、東京に戻ってからは、書で身を立ようと再び稽古に励み、師の代わりに文化服装学院で書を教えるまでになりました。こうした書の修練は、後のちひろの独特の画風を作る礎になりましたが、やはり絵への情熱を捨てることは出来ませんでした。

昭和十六年(一九四一)、太平洋戦争が始まると生活は一変し、東京の家を焼け出された一家は、敗戦後の昭和二十年(一九四五)、母の実家がある、長野県松本市に疎開しましたが、どうしても絵を学びたいという一心で一年後、絵の勉強をするために東京へ戻り、昼間は人民新聞の編集部で働き、夜は編集部と同じビルの一階にあった「芸術学校」で学びました。その甲斐あって少しずつ挿絵等の依頼が来るようになり、勤めを辞めて絵に専念出来るようになったものの、夫・松本善明の司法試験受験のため、生まれたばかりの長男猛を抱えて、一家を絵筆一本で支える生活は、

創造的な仕事を続けていく上で、決して最適の環境とは言えませんでした。夫が安定した職業につき、息子が成長するにつれて、制作に集中することが出来るようになったのですが、そうした順風満帆とは言えない生活を経て、何故描くのかということは何度も自問し、それでも描きたいという情熱から作品が生み出されたのです。ちひろの描く子どもたちが単に可愛らしいだけではない何かを発し、世代を超えて人の心を引きつけるのはそのためでしょう。

現在、東京の自宅兼アトリエのあった所と、戦時中に両親が開拓していた、長野県北安曇野郡松川村の二箇所に美術館が開館しており、ちひろの世界に触れようとたくさんの方々が訪れています。今回はこの東京都練馬区にある、ちひろ美術館・東京と長野県の安曇野ちひろ美術館のご協力を得て、金沢で展覧会を開催することとなりました。原画百二十数点と遺品等の展覧ですので、ちひろの作品をほとんど知らなかった方も、絵本で親しんだことのある方も、新たな発見があり、楽しんでいただけることと思います。

観覧料

一般	1,000円	高・大生	700円	小・中生	500円	一般	800円	高・大生	500円	小・中生	300円
個人						団体(20名以上)					

当館友の会会員は受付での会員証提示により、団体料金でご覧になれます。



傘と子どもたち 昭和44年



貝をならべる少年 昭和42年



『たけくらべ』美登利 昭和46年



戦火の中の子どもたち 昭和47年

常設展示室(第4展示室)
特別陳列

日本画家 中町進の世界

8月21日(木)~9月29日(月)

主催 / 石川県立美術館
共催 / 北國新聞社



山梨 日野春(スケッチ) 昭和40年

昭和五年、輪島市に生まれた中町氏は、二十七年に金沢美術工芸短期大学(現・金沢美術工芸大学)を卒業し、日本画家として本格的な活動を開始します。二十九年日展に初入選し、三十、三十二年には現代美術展で最高賞を得るなど、しだいに画技を向上させていきました。そして、三十二年、師・池田遙邨との出会いによって、その表現はさらに深められ、機知的な構成や詩的な色彩表現などに師の作風が反映されていきます。また師が、スケッチの虫であったように、中町氏も対象を納得のゆくまで何度もスケッチして、自己の感動を画面に定着させ、新たな作品の創造の糧としていったのです。

中町氏の作風は、時代とともに変化していきます。まず、昭和三十年代は、抽象芸術が流行した時代ですが、その動向を反映して、この時期の作風は、荒々しいタッチの黒つぶい街の風景が中心で、造形的な力にあふれた作品が多く見られます。その後、四十、五十年代にかけては、青を基調とした静謐な森の風景へとその表現は移り、抒情豊かな世界が展開されました。平成に入ると、金沢などの古い街並みを俯瞰的な視点から捉えた、幾何学的な構成による堅牢な描写が中心となります。さらに近年は、西欧や南米の赤い色調の街の景観をモチーフとし、日常的な視点からは見えない意表をついたかたちの組み合わせのおもしろさに加え、点景として配された人や動物が、そこに生きる人々の確かな営みの存在を感じさせて、見るものを飽きさせません。このように、中町氏が生涯描き続けてきた風景は、対象のあるがままの姿を写したのではなく、作者の心象風景として昇華され表出されたものといえましよう。

一方、中町氏は、こうした作画活動とともに、母校・金沢美術工芸大学で教鞭をとり後進の育成に努め、また、石川県日本画会、石川県日本画協会などに参加し、郷土の画壇の振興に尽力してこられました。

本展では、中町氏の日展出品の代表作を中心に、作者の心に残るスケッチもあわせて展示し、その美の世界をご覧いただくとするものです。

関連行事

講演会 演題「中町進の世界」を語る

講師：中町進氏

日時：八月二十四日(日)午後一時三十分

会場：当館ホール

聴講無料

列品解説 講師：中町進氏

日時：八月二十八日(木)午後一時三十分

会場：当館第4展示室

常設展観覧料が必要です



能登 月 昭和61年



能登 皆月海岸(スケッチ) 昭和46年



街角 平成8年



岐阜 錫杖岳(スケッチ) 昭和47年



暮れる 昭和37年

常設展示室 前田育徳会展示室)

特集

加賀藩の美術工芸

8月21日(木)~9月29日(月)

前田家は初代利家から歴代藩主が文化事業に深い関心を寄せ、なかでも三代利常は傑出した文化大名でした。外様大名であるが故に幕府への政治的屈従を強いられた利常が、天下一大名を誇示する唯一の方法は文化政策による反体制的姿勢の表明でした。豪放華麗な色絵を特徴とする古九谷は、その姿勢を反映していると言っても過言ではありません。

当初、武器や武具の制作・修理を行っていた細工所は、利常の代に前田家の生活調度、いわゆる大名道具を中心とする美術工芸品を制作するところに改められ、さらに五代綱紀の代に整備・拡充されました。蒔絵の五十嵐道甫や清水九兵衛、あるいは金工の後藤顯乗・程乗といった名工を招き、高禄をもって召し抱えて、指導者として名品を作らせ、また後継者の育成にも力を注いだので、加賀藩の美術工芸の水準は、江戸や京都をしのぐ勢いでした。このように、極めて高い完成度をもった美術工芸品が収集・育成されました。

先ず「後藤家装剣小道具」では、室町時代の初代法乗の作品を展示します。目貫、筭、小柄等の装剣具という極めて限られた小さな世界に、彫金の手法で独創的な美の世界を創造した初代祐乗は、我が国の装剣全工の始祖とまでいわれます。その作品の多くが前田家に収まっていますが、それは利常が元和から寛永時代にかけて、顕乗・寛乗らに命じて、積極的に後藤家歴代の作品を収集し、鑑定・整理させたからです。次に「百工比照」(重文)ですが、これは綱紀が工芸の諸分野の製品や技法を比照するため、収集・分類整理した標本です。江戸時代前期の工芸技術を知る資料として極めて貴重なもので、今回は貼付唐紙類・外題紙類・織物類・小紋類を展示します。ここに紹介した作品をはじめ、重要文化財五点を含む二十三点を展示し、今日に続く文化の礎を築いた藩主たちのエネルギーの一端にふれていただければ幸いです。

「俳画」とは、俳句に添えて描かれた絵画をいい、即興ながらも機知に富み、滑稽味に溢れていることが特徴です。それは単に俳句を絵画化したものではなく、ユーモアに満ちた俳諧の熟成とともに発展しました。室町時代、優雅に洗練され、神前に奉納する正統な文芸として、連歌が確立しますが、その一方で、日常に即した道化の文芸も絶えることなく続きます。これが室町末期以降、俳諧として栄え、やがて「画」「俳」双方に秀でた人物を生み出すに至るのです。本特集では、俳諧のコレクションとして知られる村松家資料の中から、京都などで活躍した立圃・芭蕉・樽良・甫尺、加賀俳壇の迦涼・千代尼・麦水・梅室・蒼虬などの「俳画」全二十九点を展示します。ここではその中から二点を紹介しましょう。

露も見えず風もさわらずきくの花 樽良

初秋にふさわしい一句です。この美しい菊の花には露もなく風もなく、それ自身で孤高の美しさを漂わせているよ、と詠んだものです。勢いよく描かれた菊の花が、素朴な姿をとどめています。樽良(一七二九~一七八〇)は鳥羽の人ですが、たびたび加賀を訪れ、加賀の俳人と交流したことが知られています。

『越路の記 渡り鳥』 迦涼

加賀俳壇の女性歌人といえば、まず千代尼の名が挙げられますが、それより少し前に活躍したのが迦涼(一六九六~一七七二)です。本巻は、未亡人となった迦涼が、寛延三年(一七五〇)の秋から冬にかけての四か月、越中を行脚しながら、その土地の明媚を詠み、各地の俳人との交流を記録したものです。

露はらゝ卯の花山の秋白し 迦涼

『万葉集』にも詠まれた越中の卯花山を前に詠んだものですが、共にその絵も描かれており、迦涼が見た旅の光景をうかがうことができます。

常設展示室 第2展示室)

特集

俳画の世界

8月21日(木)~9月29日(月)



『越路の記 渡り鳥』 迦涼



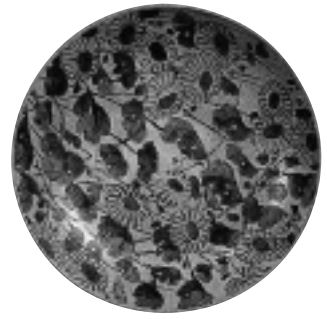
菊図自画賛 樽良

常設展示室

主な展示作品

8月21日(木)~9月29日(月)

● = 国宝 ○ = 重要文化財 □ = 重要美術品
 = 石川県指定文化財



色絵菊図平鉢

前田育徳会展示室

特集 加賀藩の美術工芸
 秋冬山水図屏風
 四睡図
 扇面散時絵手箱
 アエナス物語図毛綴壁掛

伝周文
 黙庵靈淵

第1展示室

● 色絵雄雉香炉
 色絵雌雉香炉

N.アエルツ
 野々村仁清
 野々村仁清

第2展示室

特集 俳画の世界
 伊吹山自画賛
 十二句貼交屏風(秋冬)
 高砂図画賛
 古九谷
 色絵布袋図平鉢
 青手樹木図平鉢
 色絵菊図平鉢

芭蕉
 千代尼
 中村芳中

第3展示室 (油彩画・彫塑・造形)

杏花
 エーゲ海をいく
 シャルトル風景
 彫塑・造形
 木陰の女
 若日の影

金山平三
 端名 清
 増田 孝
 米林勝二
 矩 幸成

第4展示室

特別陳列 日本画家
 3Pをご覧下さい。

中町進の世界

第5展示室 (工芸)

鷺二態壺
 漆絵四季草花図絵替り膳
 色留紋付「聖華来日」
 彩塑人形 神事鵜祭

中村翠恒
 大下雪香
 能川光陽
 紺谷 力

第6展示室 (日本画)

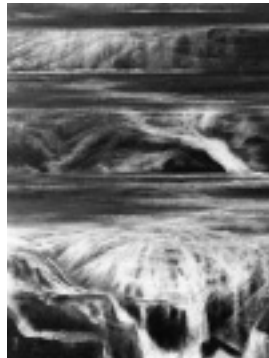
流
 寄港
 観覧料

曲子光男
 坂根克介

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	
観覧料			



彩塑人形 神事鵜祭 紺谷 力



流 曲子光男



エーゲ海をいく 端名 清

美術館小史・余話

37

嶋崎 丞すむむ 当館館長

近代美術館(仮称)の設置懇話会が提言した美術館の建設場所を、「金沢市郊外の西部緑地が適当とする」案に対して、県議会の委員会での議論はもとより、学識者や作家、多くのマスコミから反対の意見が続出し、設置場所を金沢の中心部におくよう県当局に対し訴えが始まった。昭和五十三年の暮れから五十四年の一月にかけてのことであった。私は内心自分の考えていた方向に県民の世論が向かってきたので大変うれしかったが、いざ都心部に広大な土地を求めるとなると候補地がなかなか見あたらなかった。

ところが十月に入って金沢女子短期大学が、学生数の増加にともなって未地区に移転したため、その跡地を新美術館の建設用地の候補とする案が浮上した。近代美術館設置懇話会に変わって設置された「新美術館設置懇話会」が、新美術館の設置場所は「金沢女子短期大学跡地を中心とする本多の森(現在地)」とされた」とする提言を県に対して行った。十二月のことであった。一年ほどの間によくぞこのようにうまく事が運ぶものかとつくづく思い、まさに神のお助けがあったのではないかと深く感じた。



石川県立美術館の作庭風景
 交付され故中西前知事に挨拶にお伺いすると、「君の考えていた通りの場所に建設することにしたから、重大な責務を感じて一所懸命仕事をしよう」との訓辞を賜った。私のそれまでにしてきた行動には一言も小言を言われなかったが、ぴしゃりと締められた感じであった。今でもあの声は耳元に深く残っている。

新美術館開設に向けて(二)

企画展示室

第31回日本の書展

九月二十日(土)～二十三日(火・祝)

(第7・9展示室)

日本芸術院会員の村上三島氏、杉岡華邨氏、小林斗齋氏など、現代書壇代表約八十人の作品を一堂に展示し、あわせて石川県書美術振興会会員約二百人も含め、およそ二百八十点の作品を展示します。

入場料

一般五〇〇円 高大生三〇〇円 小中生一〇〇円

当館友の会会員は、会員証提示により一般四〇〇円

連絡先 金沢市香林坊一五 一

北國新聞社事業局

☎〇七六 二六〇 三五八一

第一回石川県水墨画協会選抜展

九月二十六日(金)～二十九日(月)

(第7展示室)

当協会は過去十四回に亘り公募展を開催し好評を博して参りましたが、作品の大きさは五十号までに限定してきました。しかし年々、作品の質も向上し、県内外のファンの中より全国展のようにもつと見ごたえのある大作の発表をとの要望も強く、今回五十号～百三十号作品を初めての試みとして作者を絞り、個性的表現による協会展ならではの新しい現代水墨画との意気込みで約四十点展示いたします。ご来場を心よりお待ちしております。新しい発見があるかもしれません。

会長 小川伸洋

理事長 尾坂杜風

入場無料

連絡先 金沢市三ツ屋町八十八 三

事務局長 笠井宰州(利久)

☎〇七六 一三七 六五一一三

第45回記念北陸創造展

九月二十六日(金)～二十九日(月)

(第8・9展示室)

北陸創造美術会は、各作家がその主体性に基づくオリジナルな芸術を創造するために、もつとも自由で活動的な研鑽の場を作ることを目的としています。六月上旬、東京都美術館で行われた創造展に入選した作品を中心に、北陸支部会員百余名が、四部門(洋画・日本画・彫刻・陶芸)にわたって展示します。より多くの方々に見ていただき、ご批評を賜りたいと念願しております。また、意欲的な同意者と支持者に対し、広く門戸を開きます。

入場無料

連絡先 松任市専福寺町二二八 一五

☎〇七六 二七六 六三九五

加原和夫

なぜ石川県にこだわるの?

美術館が石川県ゆかりの作品や作家にこだわるのはなぜですか。もつと広い視野で、国内または海外の名品を集めてもいいと思うのですが、いかがでしょうか。

▲ 常設展示室では、加賀の美術・石川の美術にこだわった展示をしています。地方色豊かな美術館作りを目指し、加賀藩の藩政時代以来の伝統と、全国に誇る作家の質と量を備えた石川県の美術を、展示品を通してご覧いただいています。

加賀百万石の時代には、数々の名品の収集と優れた技術者の招聘によって、江戸や京都にひけをとらない文化が開きました。明治以降はいち早く、県の政策として技術者の保護育成が図られ、欧米への輸出を前提とした産業が発展してきました。また戦後は金沢美術工芸大学の開学により、日本を代表する教授陣が金沢に集まり、そこから優れた作家が次々と生まれています。

このように絶えることなく続いてきた美術を、石川の美術の流れとして見ていただくのが常設展示室なのです。石川の美術館でしか見られない、地域の特性を生かした展示が行われているのです。国内・海外の名品は、できるだけ企画展示室でご覧いただけるように努めています。

県美 Q&A

貸出中の所蔵品

五彩龍文透彫合子 景德鎮窯
五彩双龍文長合子 景德鎮窯
色絵蓮函酒壺

呉須赤絵花鳥文平鉢

呉須赤絵双龍草花文鉢

計五点

展覧会 古九谷の源流 東西陶磁の世界展

会期 七月十二日(土)～九月二十八日(日)

会場 石川県九谷焼美術館

各地の展覧会

九月

開催日程 休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

第七回世界ボスタートリエンナーレトヤマ2003 10/19まで

富山県立近代美術館(富山市・〇七六 四二 七二二) 9/15まで

世界の巨匠水彩素描展 9/15まで

岐阜県美術館(岐阜市・〇五八 二七一 二二二二) 8/30～10/13

神坂雪佳展 琳派の継承者・近代デザインの先駆者 8/30～10/13

京都国立近代美術館(京都市・〇七五 七六一 四二二) 9/6～10/13

フランスコミック・アート展 9/6～10/13

滋賀県立近代美術館(大津市・〇七七 五四三 二二二) 8/30～10/19

生誕百年記念 三岸好太郎展 8/30～10/19

名古屋美術館(名古屋市・〇五二 二二二 〇〇〇六) 9/23まで

レオン・スピリアルト展 9/23まで

愛知県美術館(名古屋市・〇五一 一九七 五五二) 9/28まで

トルコ三大文明展 9/28まで

東京都美術館(台東区・〇三 三三三 六九二)



畠山記念館の展示風景

企画展TOPIC

「畠山記念館名品展」その四
畠山記念館めくれ

「畠山記念館名品展」を紹介する企画展TOPICも今回が最終回となります。そこで今回は、畠山記念館とその収蔵作品についてご紹介したいと思います。

地下鉄浅草線の高輪台駅から歩くこと約五分。東京は港区白金台の閑寂な緑の中にあたらず畠山記念館は、昭和三十九年十月の開館で、今年四十年目を迎える美術館です。本館は、創立者である畠山一清氏（即翁…二二六号参照）自らが設計監督した建物で、茶道理念を反映した現代建築に、書院造の趣をよく調和させたものとして知られています。

一万五千平方メートルもの広大な敷地には、茶室と茶庭を設けた展示室を擁する本館のほかに、三棟の茶室が点在しています。三島由紀夫の小説『宴のあと』で一躍有名になった高級料亭「般若苑」も同じ敷地にあります。ここは、もと薩摩藩主の島津氏にゆかりが深く、島津重豪が隠棲した場所でした。明治維新後は、伯爵寺島宗則の所有となり、明治十三年（一八八〇）には、天皇の行幸のもと、天覧能が催されるなど由緒あることでも知られています。

即翁の美術品収集は二二六号で紹介したとおりですが、昭和三十五年（一九六四）八十歳の記念に、長年収集してきたそれら茶器を中心とする美術品、建物、庭園などを提供して設立したのが、この畠山記念館なのです。記念館は昭和三十九年から一般に公開され、四十年の時を経て、今日に至っています。

その収蔵品は、桃山から江戸時代にかけての茶道関係の美術品が中心で、国宝六点、重要文化財三十三点を含むおよそ千三百点あまりにものほりまゝです。前田家が旧蔵したものももちろん、

本多家、横山家といった加賀藩にゆかりの品々も数多く所蔵しており、今回展示する百点の中の十五点が金沢に関連する品です。

記念館では、四季折々に年四回の展示が行われています。所蔵品による茶道具の取り合わせを中心に、濃茶・薄茶・懐石の構成で、一会の茶事の形式による独自の展示方法がとられています。ところが、展示スペースの関係から、一度に展示できる作品は五十点ほどで、今回当館で開催する「畠山記念館名品展」が同館所蔵品の展示としては最大規模のものになります。

他館への貸出を行わないことを旨としてきた畠山記念館にあつて、金沢は創立者一清氏ゆかりの土地といふことでこの展覧会が開かれることになりました。こうした規模の展示に対し、東京にお住まいの方からも、一堂に展示される作品をぜひ見たいと、今から期待の声も上がっています。（谷口 出 学芸専門員）

開館20周年記念 畠山記念館名品展 茶道美術を中心に
十月四日（土）～十一月三日（月・祝）

九月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
9/6(土)	土曜講座	レオナルド・ダ・ビンチ 人と芸術 (織田 春樹 学芸主任)	講義室
9/7(日)	CDコンサート	20世紀の名指揮者 ヘルベルト・フォン・カラヤン3 オッフェンバック喜歌劇「天国と地獄」ほか(約50分) 演奏 ヘルリン・フィルハーモニー管弦楽団	ホール
9/13(土)	土曜講座	俳画の世界 鑑賞のための基礎講座 (村上 尚子 学芸員)	講義室
9/14(日)	連続講座	開館20周年記念連続講座	ホール
9/20(土)	土曜講座	美術館よもやま話 加賀藩の美術工芸 講師 嶋崎 丞(当館館長)	講義室
9/21(日)	月例映画会	「加賀藩の美術工芸」より 前田家の染織コレクション(寺川 和子 学芸主任)	ホール
9/27(土)	土曜講座	日本の肖像画 歴史上の人物たち その姿と影(23分)	講義室
9/28(日)	月例映画会	洋画家列伝16 中村 彝 (二木伸一郎 学芸専門員)	ホール
9/28(日)	月例映画会	水墨画(22分) 墨龍 加山又造(27分)	ホール

全館休館日は九月三十日(火)～十月二日(木)です。

第33回文化財現地見学のお知らせ

今年度の文化財現地見学は、現在次の予定で準備を進めています。見学コースや申し込み方法などの詳細は、来月号に掲載いたしますので、しばらくお待ち下さい。

日程 十月十八日(土)～十九日(日)

一泊二日

見学先 奈良県(明日香・室生方面)

見学地 橘寺(明日香村)、飛鳥寺(明日香村) 室生寺(室生村) 他

申込抽選会 実施日の一週間前頃を予定



柘造筋違菓子器

筑城良太郎

明治7年(1874)~昭和7年(1932)

大正3年頃 c.1914

口径10.6 胴径19.5 高28.0(cm)

柔らかく滑らかな形体の壺型菓子器で、五段重ねとなつています。まず目を引くのは、蓋と身に施された「筋挽き」と呼ばれる独特な装飾です。段ごとに種類が異なります。「筋挽き」とは轆轤を回転させながら、特殊な鉋や小刀で様々な筋を付けたものを指します。蓋には渦と曲線を合わせた模様筋、そして上段から順に小刀筋、山道筋、鉋筋、広糸目、子持筋がそれぞれ付けられています。さらに底面にまで渦と稲穂筋が施され、まさに筋挽きの見本といった趣です。胴部に目を移すと、枋材の持つ緻密な木肌がそのまま生かされ、特徴ある空目がほのかに浮かびます。ゆるやかな山道筋が全体を引き締めるようにして、そこはかたくなに優雅な風情を漂わせています。「千筋挽きの名工」

と謳われた作者の技が冴えわたる作品といつていいでしょう。

筑城良太郎は江沼郡山中町生まれ。父善吉は長体漆に優れていましたが、その父の希望により木地工旭弥三吉に師事し、挽物技術を学びます。現在では基本的な技法となつている「拭漆仕上げ」を創案したのは、明治二十年代のことでした。筋挽きの工夫にも余念がなく、明治三十、四十年代にかけて、広糸目や山道筋など新しい筋挽き(総称「千筋」)を次々に発案しました。内外の博覧会でも受賞を重ね、後進の育成や同業者の啓発にも尽力し、大正六年には石川県実業功労者賞を受賞しています。

(第5展示室で展示中)

ミュージアムショップ通信

今月は星の話題を一つ。火星が約六万年ぶりに地球に大接近します。真夜中、南東の空にざらりと輝く赤い星が火星です。八月二十七日に最も近づきます。たまには夜更かしをして星を眺めるのもいいですよ。

さて、おしゃれなガラスの器「角皿」を紹介しましょう。価格は一万円。使っても飾ってもOKです。二種類あるので迷ってしまうかもしれませんね。



「角皿」
(定価10,000円)

次回の展覧会

特集 尊経閣文庫名品選(前田育徳会展示室)
特集 秋の優品選 (第2・6展示室)

十月三日(金)~十一月三日(月・祝)

開館20周年記念

畠山記念館名品展

茶道美術を中心に

(第7・9展示室)

十月四日(土)~十一月三日(月・祝)

休館日

九月三十日(火)~十月二日(木)

石川県立美術館だより

第一二二九号 平成十五年八月二十一日発行

〒九一〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六(一三三)七五八〇

FAX 〇七六(二二四)九五五〇